

チエルノブイリ通信

発行：「切尔ノブイリ支援運動・九州」事務局

連絡先：北九州市小倉南区徳吉東 1-13-24

TEL・FAX 093-452-0665

口座番号：福岡 7-65328

加入者名 : チエルノブイリ支援運動九州



**Беларускі
Зацыяльна-Экалагічны
Саюз "Чарнобыль"**

Рэспубліка Беларусь
220048 Мінск, вул.Мясікова, 39
Тэлефон (0172) 20-39-04
Тэлефакс (0172) 23-90-14
Афіцыйны прадстаўнік у ЗША:
IPY News USA Inc.
30 Farragut Str., Uniontown, PA., 15401
Тэл. и факс: (412) 437-5808



**Belarusian
Socio-Ecological Union
"Chernobyl"**

Republic of Belarus
220048 Minsk Miasnikov street 39
Telephone (0172) 20-39-04
Fax (0172) 23-90-14
Official Representative of the USA:
IPY News USA Inc. 30
Farragut Str.,
Uniontown, PA., 15401
Ph. and Fax: (412) 437-5808

ОБРАЩЕНИЕ

к Движению помощи "Чернобылю о.Кюсю, ко всем японским друзьям, борющимся за экологически чистую землю, нравственное и физическое здоровье детей и родителей.

Дорогие друзья!

Всему миру известно, что народ суверенной Республики Беларусь, как никакой другой народ, потерпел от Чернобыльской катастрофы. Это случилось в пору экологического и экономического кризиса, охватившего бывшие республики СССР. И в этот острый исторический момент мы проникаемся чувством все большей признательности к различным общественным организациям, учреждениям, отдельным гражданам Японии, оказывающим нам бескорыстную помощь.

Те, кто побывал в Беларуси после аварии на Чернобыльской АЭС, имели возможность убедиться насколько велики потери, нанесенные земле, народу, нации этой глобальной бедой. Становится предельно ясным и очевидным тот факт, что одному народу в сложившейся ситуации не справиться, не выжить, что здесь нужны помочь и поддержка всего мирового сообщества.

В этой связи особое практическое, морально-нравственное и политическое значение приобретает факт учреждения Движением помощи Чернобылю о.Кюсю совместно с Беларуским социально-экологическим союзом "Чернобыль" Молодежного реабилитационного центра "Кюсю-на-Свислочи" /под Минском/. 7 декабря этого года состоялось его официальное открытие с участием первого заезда чернобыльских детей и японской делегации, возглавляемой господином Руиши Накамурой.

Японской стороной при этом передан санаторию диагностический аппарат УЗИ "Алока", а также 50 тысяч долларов и многочисленные подарки детям. Расходы японской стороны в оздоровлении

ослабленных чернобыльских детей в санатории составят около 50 процентов от всех общих расходов.

Итак, факт открытия санаторного центра "Кюсю-на-Свислочи" состоялся, с чем я сердечно и искренне поздравляю всех участников Движения помощи Чернобылю, собиравших на эти цели средства, поздравляю всех жителей Японии и особенно острова Кюсю.

Мы едины с Движением помощи Чернобылю во мнении: самый эффективный и экономически наиболее оправданный способ оздоровления жертв чернобыльской катастрофы /с участием зарубежных партнеров/ - это способ вложения средств в оздоровление на месте, в чистых регионах Беларуси.

Открытие МРЦ "Кюсю-на-Свислочи" на арендованной базе спортивного комплекса - это лишь начало нашей большой и благородной работы по программе оздоровления. Мы продолжим эту работу, которая несет спасение беларусам и которая вполне может составить честь не только общественным организациям Японии, Движению помощи Чернобылю, Чернобыльскому фонду, Движению приемных родителей, но и всем людям доброй воли Страны Восходящего Солнца.

Правлением Социально-экологического союза "Чернобыль" принято решение о сборе средств в своей республике и за ее пределами на строительство собственной санаторной базы на 300 мест по уже имеющемуся у нас проекту. Это - перспектива нашего общего дела.

Поэтому еще раз делюсь с японскими друзьями своей радостью большое дело, мечта моя и наша воплотились в реальность -- санаторий "Кюсю-на-Свислочи" открыт!

И пусть будет счастливым наше хорошее начинание. Поддержим его новыми своими усилиями, новым упрочением уз далеких и близких по творческому духу народов.

Уверен, люди других стран поймут и поддержат нас.

Василь Яковенко,
президент Социально-экологического союза "Чернобыль", главный редактор газеты "Набат", писатель.

Ленинск
12. XII. 1992г.

メッセージ

きれいな地球と子供や親の精神的肉体的健康をめざして闘っている「切尔ノブイリ支援運動・九州」と日本の友人のみなさまへ

親愛なる友人のみなさん！

全世界にすでにあからかに主権国家ベラルーシの国民は他の国民に比べても切尔ノブイリ事故の被害を多くこうむっています。これにはエコロジーの面とさらには経済的な面での危機も加わっています。彼の旧ソ連の共和国もこれと同じ状況です。こうした厳しい歴史的局面の時期に、私たちに対して無私の援助をしてくださっている日本の様々な団体、機関また個人に対して心から感謝の念を表したいと思います。

切尔ノブイリ原発事故の後ベラルーシを訪れた人は誰でも、この災害が土地、国民、民族にあたえた損失が莫大なものであることを認識できると思います。現在、この災害の真の状況が明らかになってきています。それは一つの民族が世界的な支援をうけることなしには問題を解決し、生き延びていくことは出来ないことを明らかにしています。

そこで切尔ノブイリ支援運動・九州とベラルーシ社会エコロジー同盟「切尔ノブイリ」の共同によるミンスク郊外の「青少年リハビリセンター・九州」の開設は実践的にも精神的にも政治的にもとりわけ意義のあるものです。今年12月7日、初めての入所者をむかえ、中村隆市氏を団長とする日本からの代表団の列席のもとに開所式をおこなうことができました。

席上、日本側から、超音波診断器、5万ドルの資金、多くの子供への贈り物が贈呈されました。日本側からの資金はセンターでの切尔ノブイリの子供達の健康回復のための費用の50パーセントにあたります。ここで「青少年リハビリセンター・九州」の開設にあたり、私はこのために資金をあつめてくださった「切尔ノブイリ支援運動・九州」の会員のみなさんと日本の国民のみなさん、とりわけ九州のみなさんにお祝いを申し上げたいと思います。

切尔ノブイリ支援運動・九州のみなさんと私たちは同じ見解であります。つまり、切尔ノブイリ事故の犠牲者の健康回復をするためにもっとも効果があり経済的な方法は（外国の友人も参加出来る）健康回復を現地でベラルーシの非汚染地区でおこなうことであるということです。

スポーツ施設を借り上げての今回の「青少年リハビリセンター・九州」の開設は住民の健康回復計画の崇高な事業の第一歩にすぎません。私たちはこの事業を

続けていきましょう。このことはベラルーシ国民の救援にもなるでしょう。このことは日本の様々な団体、「チェルノブイリ支援運動・九州」、「チェルノブイリ基金」「里親運動」の名誉だけでなく、あたたかい心の「日いづる国」の人々の名誉になるでしょう。

社会エコロジー同盟・チェルノブイリ運営委員会は共和国全体で資金募集の活動を行うことを決めました。それはわれわれの計画である自前のサナトリウムを全国に300ヶ所建設するためのものです。これは共同の事業の展望でもあります。

そこでもう一度、日本の友人のみなさんと共に、よろこびを分かち合いたいと思います。それは大きな事業、私のそして私たちの夢がついに現実になったこと、サナトリウム・九州の開設です！

私たちのすばらしい出発が幸運でありますように！創造力にとんだ遠くて近い両国民の新しい力と新しい団結を持続していきましょう！

他の国の人々も私たちの事業を理解してくれるでしょう。

ミンスク 1992年12月12日

ワシリ・ヤコベンコ

社会エコロジー同盟「チェルノブイリ」議長

同機関紙「ナバト」編集長

作家



Аями ВАТАНАБЭ



Кейдзи ОТОМО,
директор Токийского
отделения фонда
“Чернобыль”

大変お待たせいたしました。ようやく「切尔ノブイリ通信」No.18をお届けすることができ、ホッとしています。『調査団は12月中頃には帰ってきているはずなのに何の報告もない』とお怒りのことと思いますが、調査団メンバーが体調を崩したりとか、日程の調整が取れなかったりで、2月7日（日）によく全員が集まれる場が持てた次第です。そうした事情もあり、約2カ月ぶりの通信の発行となりました。今回は調査団報告ということになります。

サナトリウム「スピイスロッヂ河畔の九州」オープン！

昨年12月1日、「サナトリウム九州」は無事オープンしました。ペラルーシでは「スピイスロッヂ河畔の九州」と呼ばれてています。

ミンスクから20キロ郊外にあるスタイキーという町にサナトリウムはたたずんでいます。そこはすぐ側をスピイスロッヂ河が流れ、針葉樹の木立に囲まれた静かな所です。旧ソ連時代、オリンピック選手のための強化村として作られた地区で、敷地にはあらゆる施設が整っていました。施設自体はいまでもオリンピック選手のためのリハビリ用の施設として使われており、「サナトリウム九州」は、その一画の3棟を賃借してのオープンです。

調査団が訪れたときには、サナトリウムの記念すべき第一期生として、ゴメリ州カリンカビッチ市近郊から125人の

子供たちと10人の教師が検査と治療と保養にきていました。（建物をサナトリウム用に改築中で、1月には70人増え、195人になる予定。）

保養期間は一ヶ月、

年間2400人の子供たちが保養

サナトリウムをオープンさせるにあたっての同盟と私たち「支援運動・九州」との確認は、「200人の子供たちを収容し、期間は1年」というものでした。そこでこのサナトリウムを支援していくために、サナトリウムにかかる子供一人分の費用を、日本人が「里親」として面倒みていくという呼びかけを行いました。この呼びかけに答えていただき、現在150人ほどの人が里親になっていたいっています。

ところがというべきか、やはりというべきか、ペラルーシには切尔ノブイリの子供たちのためのサナトリウムは、こしかなく、サナトリウムへの入所希望者が大変多く、当面は一ヶ月単位でより多くの子供たちに「転地療養」の機会をあげたいという事になったそうです。つまり、「保養期間を一ヶ月とし、年間2400人の子供たちを収容する」という事に。

そこで、里親になっていただいた皆さんに、お願ひと提案があります。

子供一人分の費用を一年間面倒みるという形での「里親」ということでは少し状況が変わってきたが、日本からの援助なしにはサナトリウムが維持できな

いのも事実です。状況は変わりましたが、「子供一人の里親」ということではなく、「子供十二人の里親」ということでご理解いただけないでしょうか。サナトリウムに入所した子供たちとの関わりということでは、日本の里親運動についての説明をサナトリウムで行い（里親カードを見せながら）、それに応える形で、全員の子供たちからのメッセージと写真を持って帰っています。（現在翻訳中。3月中には報告集としてお届けできます）ほとんどの子供たちが、日本の子供たちとの文通を望んでおり、こうした形での交流は可能です。

「サナトリウム九州」のオープンは、ペラルーシでは大きな反響を呼んでいます。子供たちにも、大人たちにも大きな心の支えとなっています。現在200人ですが、500人まで収容可能だそうです。

サナトリウムを支援し、更に大きな運動としていくためにも、引き続き皆様のご理解とご協力をお願いします。

■ モズィリ市歓迎夕食会でのリージヤ支部長の話を紹介します。

『サナトリウムは、一般的なサナトリウムはあったが、放射能被害の子供たちのためのサナトリウムは、これまでペラルーシにはなかった。この6年間必要だったものが、ようやくできた。モズィリの子供たちは1月11日から150人位サナトリウムに行く予定になっている。子供をサナトリウムに行かせたいと思っている親はたくさんいるが、入れる人数が限られている。

ミンスクだけでなく、モズィリにもサナトリウムを作りたいが……。私の夢はペラルーシのたくさんの方々にサナトリウムができる事。そうなつたら本当に嬉しい。』

ペラルーシの「子供アンサンブル」

この夏 日本公演！

「アンサンブル」：コーラスや楽団、踊りなどを組合せたもので、実際に観賞した観想は「なかなか素晴らしい」ということで、芸術性もすぐれているそうです。ペラルーシの子供たちは、別に劇団に所属していないても、即興で歌や踊りを披露してくれるそうです。それだけ自分たちの文化を大切にしている民族なのです。

単に支援するだけでなく、ペラルーシのこと、文化のことも知る必要があるのでは、という指摘もあり、今年のメイン企画として「ペラルーシの子供アンサンブル」を招待してはいかがでしょうか。

10人から15人程度（付き添いの大人を入れ）一行を考えています。夏休み以外でも日本にこれるかどうか、現在問い合わせ中なので、時期、期間についてはまだ分かりませんが、8月～9月ぐらいを考えています。

「チェルノブイリからのメッセージと子供アンサンブルの公演」という企画です。詳しく分かり次第、報告します。

受け入れのための検討をしてみてください。
(深江)

第二次調査団一行程メモー

【12月 6日(日)】

7:10 福岡空港発羽田行
14:20 成田空港発モスクワ行
24:35 (モスクワ時間17:20)
(ミスクワ) シュレメティボ空港着、
19:40 通関完了
20:40 インツーリストホテル着
(二人部屋、2万円弱)

【12月 7日(月)】

(小雨)

8:00 朝食 (バイキング、一人300ルーブル、約90円)
9:30 ミンスクに向けモスクワ出発 (ワゴン車)
13:50 昼食 (国境近くのレストラン、1人約40円)
17:30 (ミンスク時間16:30)
(ミスクワ) 同盟事務所着
17:40 サナトリウム着
18:30 夕食、ミーティング (ヤコベンコ議長とスケジュール調整)

【12月 8日(火)】

(小雨)

9:00 朝食
午前中 小児血液病センター訪問
12:00 同盟幹部会議に出席
14:00 昼食 (レストラン)
16:00 サナトリウム九州オープンセレモニー

20:00 歓迎パーティー (医師、教師、同盟メンバーと)

【12月 9日(水)】

(くもり)

8:30 朝食
11:10 サナトリウムに食料を供給しているファイコーコルホーズ訪問。議長等と会見。
16:00 モズィリに向け出発 (チエルノブイリから80km圏)
20:20 モズィリ市歓迎夕食会 (ヤコベンコさん姉宅、市長、エレナ医師他)

23:30 ホテル泊

【12月 10日(木)】

(くもり)

9:30 朝食
11:00 モズィリ市役所表敬訪問
12:00 ホイニキ市役所訪問 (市長地区病院責任者、ノビツキ教授他)
14:00 昼食会
15:40 パプチン実験センター見学
18:30 モズィリお別れ夕食会 (市長、コルホーズ労組議長、エレナ医師他)
24:00 サナトリウム着 (ミーティング)

【12月 11日(金)】

(雪)

8:00 朝食
12:30 サナトリウムにて子供達と先生たちの写真撮影
17:00 同盟にて、ヤコベンコさん

との話し合い
18:40 画家アトリエ訪問（セルノブイリの画家、映画監督の案内）

調悪く、コルホーズとモズイリ行きには同行せず、サナトリウムの取材を行う）

【12月12日(土)】

(雪)

10:00 同盟事務所
13:30 平和基金事務所訪問（エゴロフ氏、ペトリヤエフ教授と会見）、昼食
14:00 サーカス、教会訪問、子供アンサンブル見学、指導者とお茶パーティー、お別れ夕食会（レストランにて、ヤコベンコさん、チーフドクター夫妻、チタン会社）
23:30 サナトリウム着

【12月13日(日)】

(雪)

9:30 サナトリウムでお別れコンサート（子供たちの歌とおどり）
10:20 サナトリウム出発
13:20 ミンスク空港離陸
14:05 モスクワ着
15:30 モスクワ観光
19:20 シュレメティボ空港通関
0:27 離陸（5時間遅れ）

【12月14日(月)】

(日本時間)

16:50 成田着 解散
(12/9, 12/10は村上さんは体

■ ファイロー コルホーズ

サナトリウムに食料を供給しているコルホーズ。議長はヴォフォノー、ヴィッチさん。農場全体の面積は2589ha、そのうち2109haが耕地。放射能値は、ベラルーシ平均よりも低く、非汚染地である。家畜は乳牛と肉牛を3000頭飼育している。全穀物（小麦、大麦、ライ麦）の平均生産高は4・5トン/h aであり、一般のコルホーズより収穫はいい。農薬はたくさん使い、有機農法について非常に興味を示していた。

コルホーズには労働者が500人（住人は1500人）で、保育園も小学校もコルホーズが建設したものがある。ここで育った子供の50%はここで働くそうだ。

ベラルーシの非汚染農地だけで生産した場合、全体必要量の何%が生産できるか？、という質問に対して、『キチンと調査されてはいないが30%位だろう。サナトリウムの食料は全てここから供給されるの』とのこと。

コルホーズで今一番必要としているものは、加工、保存の設備。「穀物を粉にする性能のいい機械が欲しい。野菜の保存、加工の設備。（例えば、ポテトチップス）特に、サナトリウムの子供たちのために、果物と野菜のジュースにハチミツを混ぜたものを作れる設備が欲しい。牛肉の加工、保存、パッキング、ミルク

のパックづめ設備、麦類の乾燥機（今あるのはよく乾燥しない）、缶詰設備、チーズ、バターの生産設備」といった農産物の保存や加工のための設備が望まれている。

この国にとって貴重な汚染のないリンゴやバレイショが腐つたり、麦類やミルクや牛肉がいたんだりしないような、保存や加工の設備は安全な農産物の増産と同じくらい必要なようです。

■ トロロ計画

今回の調査団は、たくさんの支援物資と共に、大きな希望、夢も持ち込みました。それはどんぐりの木の実です。この木の実を汚染地に植え森に育てようという名付けて「トロロ計画」。大友さんの提案によるもので、東京と九州から木の実です。

セシウムやストロンチウムで汚染された土地は、何もしないでそのままの状態なら、ある程度浄化されるまでには30年かかります。しかし、どんぐりを育て、森を再生することで、その浄化が100年～150年でできるかもしれない、樹木が放射能を吸収してくれるからです。そんな希望を持ってどんぐりの木の実を子供たちに託しました。今度行くときには、当たり一面に元気な芽を出しているかも知れません。

■ サナトリウム・チーフドクター

コプティック・アレキサンドラビッチさん（と奥さん）

* 1946年ミンスク生れ、ミンスク医学学校を出て23年間軍医、1987年にチェルノブイリエリアで3ヶ月、シティメディカルセンターで働いた。

■ サナトリウムのドクターになった理由は。

□ 実際にチェルノブイリエリアで実状を見て、何とかしなければ、自分の技術を生かしたいと思った。（奥さんの印象では、ものすごいショックを受けてチェルノブイリエリアから帰ってきたそうだ）人間の性質として人はだいたい、時が経つといやなことは忘れるが、6年経っても忘れられない。人間はいつもやらなくっちゃいけないというプレッシャーを受けながら生きてはいけない。行動しなければいけない。

■ サナトリウムがスタートしての観想

□ 今、まずいと思うのは、精密検査をするために子供たちをミンスクの町まで送っていること。そうではなくて、先生をサナトリウムに連れてくるようにしたい。1月から専門医がそれぞれサナトリウムに常駐するように計画している。

■ アンサンブルや演劇などの文化的なものを入れるねらいは。

□ 精神的支えを与える。子供たちに輝きを与えないでは意味がない。子供たちの要望には、ディスコパーティーもあるが、重要なのは、そのような子供たちに

対策をしていることを示すことです。ベラルーシに子供たちはみなチャレンジを知っている。皆不安を持っており、自分で体を気をつけようと思っている。ミンスクまで来ることの意味は、汚染地から離れて、空気も大丈夫、食べ物も大丈夫という気持ちになれることが大切である。

(ヤコベンコ)だから、ぜひ、日本の文化との交流をしたい。

■ 九州の人にメッセージがありますか

□ 私たちの苦しみを自分の苦しみとして受け取ってくれて、言葉でなく行動してくれて、本当にうれしい。ほんとに、ほんとに、ありがとう。言葉がないくらい、言いきれないくらいうれしい。

(中村)

報告はまだまだたくさん続きますが、残りは「第二次調査団報告集」の中でということで終わります。 (ふ)

「サナトリウム九州」 村上 純子

「サナトリウム九州」の視察と、その開会式に出席するために訪れたベラルーシ共和国の首都ミンスクは、幾度かの戦いで町を破壊されたが、第二次大戦後、旧ソ連の国力で再建された町だ。いかにソ連が国民の犠牲のもとに、その国力を維持してきたかが随所に見受けられた。建物の外観は立派であるが、内部は、公共施設、民間アパートを問わず貧弱であ

る。特に、トイレのみすばらしさには驚かされた。しかし、そこに住む人々は、それとは裏腹に歴史の重みも手伝ってか、非常に文化的水準が高いのだということが、画家たちや芸術家たちとの出会いで感じた。

文化圏であるミンスクから20Km郊外のスタイキーの町に、我々が目指すサナトリウムはたたずんでいる。そこは、スピスロッヂ河畔の針葉樹の木立に囲まれた、旧ソ連のオリンピック選手強化村で、あらゆる施設が整っていた。「サナトリウム九州」の活動は、その一画の3棟を賃貸して、1992年12月1日始まった。このサナトリウムは、九州の支援を受けて「社会エコロジー同盟」が管理を行なっている。

記念すべき第一期生として、200Km離れたカリンカビッチ市近郊から120人の子供たちと10人の教師が24日間の滞在で保養にきていた。8~18歳までの生徒によって一つのグループが作られている。カリンカビッチ市内や、近隣のボロデッキン村、ヤキモビッチ村等からの生徒たちである。長期滞在のため、就学児を持つ教師は自分の子を同伴しての参加である。サナトリウム滞在中、学業面においては、各グループ毎に教師がカリキュラムを組み、上級生は、下級生の面倒を見ることによって、教師を助けている。各自教科書持参の保養ではあるが、健康管理プログラムが第一優先であることはいうまでもない。

一日の生徒の日程は、まだ暗い7時に起床、8時には、徒步で5分程離れた食堂まで、朝食のためにかける。帽子をかぶり、マフラーをし防寒着に身を包みブ

ーツを履いて出かけるので、準備はなかなか大変なものである。しかし、朝の良い散歩であり、森林浴にもなる。朝のメニューは、砂糖のたっぷりはいった紅茶、チーズ、ソーセージ、ライ麦パン、それにヨーグルト等である。卵料理やお粥のようなものでることもある。ジュースは白樺ジュースである。

9時半から午後1時の間に、スチームバスに入ったり、スポーツを行なつたりするが、10時から11時半の間に順番に「酸素カクテル」を吸引する。「酸素カクテル」とは、フルーツジュースに卵の自身を混ぜ、その中に酸素を送りこみストローで吸うのである。このようにして、体に酸素を送りこむのだそうで、健康維持の基本ということである。

午後1時になると昼食のため、再び完全防備をして食堂に向かう。この時期の平均気温は-10℃という寒さである。

塩漬けのキャベツか、煮た赤キャベツ、ジャガイモであり、魚や、緑色野菜がすることは皆無にちかい。しかし、蜂蜜、ヨーグルトが豊富である。

4時半から6時半までは、レクリエーションにあてられている。子供たちの要望でディスコを行うこともあるそうだ。他にスポーツ、音楽鑑賞、観劇等様々な企画が組まれている。就寝前に、ビタミン補給のため果物、りんごを食べることもある。

食物の種類が驚くほど少なく、私たちのバラエティーに富んだ食卓からは、思いもよらぬ程質素で、色どりがない。私たちのもつている温室栽培の技術を、何とかこの国に伝える方法はないものかと強く思った。現在このサナトリウムには、

一般の運動選手も滞在しており、生徒たちの食事メニューが、彼らと同じと聞き驚いた。栄養のバランスは、大人の運動選手に合わせたものになっているため、油が多く、子供には不向きであり、子供に合わせたメニューの作成が「サナトリウム九州」の重要な課題であると、担当医が語っていた。食料の供給元は、近くのコルホーズで、放射能に汚染されていない作物が届けられていた。

生徒たちの宿舎は、二人一部屋で、洗面、トイレ、バスが備わっており、一室の広さは、4畳半位であり、寝室と居間の2部屋からなっていた。しかし、子供たちの為にではなく、あくまで選手たちに適したように建てられているので、遊戯室や、図書室のような設備がなく改善の余地があるように思えた。

生活環境としては、建物全体にスチームが入っており、セントラルヒーティングで外気は、マイナス10℃であっても室内は24~25℃と快適である。

このサナトリウムに足りないものは、何といつても診療所であろう。選手村としての診療所はあるが、子供たちの為のものではない。「サナトリウム九州」の専門医師として、元軍医コプテック・アレキサン德拉ピッチ氏と、助手で内分泌専門医、ニーナ・ジェナヂブナ氏が「社会エコロジー同盟」から派遣されているが、今のところ、彼らの仕事は、ミンスクの医療機関と連絡をとり、医療検査のため、各グループの教師とともにミンスクの病院に彼らを引率することである。一般的な健康診断だけでなく、甲状腺肥大等の精密検査をミンスクまで出向いて行っている。 Chernobyl accident after, 6

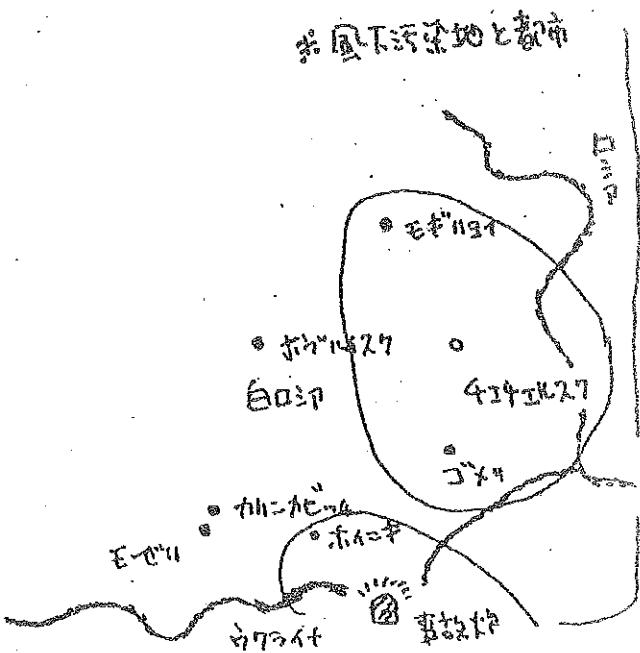
年も経つが、地元の医療機関では設備が整っておらず、全く医療検査を受けていないのが現状である。

切尔ノブイリから80Km程離れた汚染地区に住むカリンカビッチの人々は、他の汚染地区同様、被爆の後遺症に関する情報が乏しく、心に不安を持ちながら生活している。今回はじめて「社会エコロジー同盟」の働きかけで、診療の機会を得たのである。このプログラムに参加できる生徒たちは、学校当局、及びその地区の保健省によって健康のチェックを受け選定される。また、その地区的労働組合が、経費を負担するなど全面協力しており、次世代の子供たちを救おうと必死であるとある教師が語ってくれた。

「サナトリウム九州」のプログラムでは、120人の生徒たちが医療検査のためミンスクまでやってきて、24時間保養もかね滞在する。しかし、疲れやすく、病気がちな子供たちにとっては、十分な保養とはいえず、再び汚染地区に戻り、汚染された食物にさらされる現状を思うと心が痛む。それでも彼らにとっては、専門家による医療検査を受けられるという期待から、親たちはこぞって子供たちをこのサナトリウムに送ることを切望しているとのことである。また、経済的理由と、対象となる子供の数の多さの点でも問題がある。

最近の調査結果で、汚染地区内に入っていてもスポット的に無汚染地区があることが、明らかになってきている。このような地区にサナトリウムを設け、専門医と検査機器が備わっておれば、子供たちは遠く親元を離れて保養する必要はない。そして、週末には親元に戻り、長期

的にサナトリウムに滞在することも可能であり、汚染された食物から開放され、真の療養になるであろう。私たちの提唱している里親制度も、実は、子供たちに彼らの「ふるさと」で療養できる方法を供に模索することにあるのではないだろうか。そう感じた旅だった。



“КЮСЮ-НА-СВИСЛОЧИ”

Молодежный реабилитационный центр с таким названием принял первых отдыхающих в олимпийском спортивном комплексе “Стайки”.



— С помощью медицинского, спортивного оборудования здесь могут одновременно лечиться, укреплять здоровье до пятисот детей, — сказал директор комплекса А.Байко. — Созданы все условия для отдыха и занятий спортом. А, сейчас в “Стайках” можно будет еще и диагностировать маленьких пациентов.

Своим названием Центр обязан японцам, которые проявили к нему большой интерес. Делегация общественности острова Кюсю привезла для Центра медицинское оборудование, игрушки, сувениры, книги.

— Я приезжаю в Беларусь уже шестой раз, — поделился житель Кюсю К.Отою. — И уверен — не последний. Мы привезли с собой

саженцы разных японских деревьев. Поможем вашим школьникам научиться ухаживать за ними. А потом здесь, возле Центра, въедут настоящий японский лес...

Оказывается, даже восемь тысяч километров не могут помешать объединиться людям в благородных целях. И незнакомое японское слово “Кюсю” сольется с белорусским, певучим — “Свислочь”...

И.ПАВЛОВСКИЙ

НА СНИМКАХ: во время встречи с японскими друзьями.
Фото Ю.БОНДАРЕВ

КАЗАЛОСЬ, ЧТО ГОВОРИТ С

写真：日本の友人とのパーティーで。

У нас в классе был необычный урок: заслушали актрисой, и с поэтом. Когда звучали от первого лица, нам даже казалось,

「九州・スピイスロッヂ」

このような名称の若者向けリハビリセンターが、オリンピック・スポーツセンター複合施設で、初めての利用者を受け入れた。

所長のА・ボイコさんによると、ここでは、医療、スポーツ器具を使って、500人までの子供が治療と健康増進を同時に使うことができる。今後は、「スタイキ」では、小さな患者たちの診断もできるようになるだろう。

センターの名前は、大きな関心を払ってくれた日本人たちにちなんでいる。九州からの代表団が医療器具、おもちゃ、おみやげ、本をセンターのためにもってきてくれた。九州の住民の大友さんは、「私はベラルーシは6回目ですが、最後ではないと確信しています。

私たちはいろんな日本の樹木の種を持ってきました。世話を仕方をベラルーシの子供たちに教えましょう。そして、ここ、センターのそばには、本物の日本の森が生い茂ることでしょう。」

八千キロという距離も、人々が貴い目的で結びつくことを邪魔はできないことが分かった。未知だった日本の言葉「九州」が、ベラルーシの歌うような言葉「スピイスロッヂ」と重なった。



Юлия Вале

1983 года в январе
Мне 9 лет.

Мой адрес:

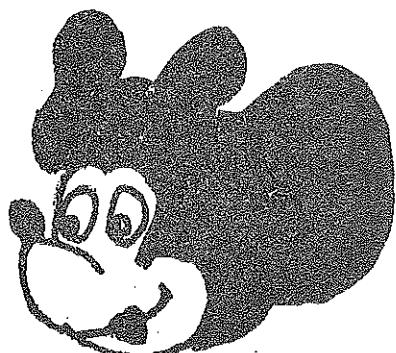
Башкирская область
г. Кыштым.

ул. Губанова д. 22
телефон 2-99-54

Я родилась в городе Кыштым. Моя семья состоит из четырех человек: мать Юлия Светлана Николаевна, она работает воспитателем в детском саду. Папа Юлия Николай Михайлович, он работает методистом в Доме Тюнера и школы искусств. Моя сестра Юлия Николаевна Николаевна, ей 12 лет, она учится в 7.. А., классе.

Я приехала в санаторий 5 декабря, чтобы поправить свое здоровье.

Я хочу на материнский курсок.



No 17

ジュラブリューバ・タニヤ

1983年 11月7日生まれ 9才 150cm 32kg ホミチユアパート出身

家 族： 父 運転手 母 教師

7年生 兄 5年生

サナトリウムに来た目的： 休息と治療のためです。

長所・特技： 日本の友達は私に本と種をプレゼントしてくれました。私は本をとっても気にいっています。私は数学と歌作るのが好きです。

住 所： 247709 ベラルーシ共和国 ゴメリ州 カリンコビッチスキー地区 ハミチ～2

No 18

ピツレンコ・ジョラ

1982年 2月 5日生まれ 10才 156cm 39kg ホミチ～2アパート出身

家 族： 父 電気工 母 学校の技術者 妹 3年生

サナトリウムに来た目的： 健康診断のためです。

長所・特技： 絵を描くのが好きです。

住 所： 247709 ゴメリ州 カリンコビッチスキー地区 ホミチ～2 アパート

No 19

デムコワ・オリガ・ニコラエブナ

1959年 5月11日生まれ 33才 159cm 59kg ゴメリ州 ペトリコワスキ地区出身

家 族： 夫 都市ガスの仕上工 私 学校の経営部の副管理者 3人の子供

サナトリウムに来た目的： 検査と治療のため我子と他の学校から数人の子供達を連れて来ました。治療が必要な病気で弱っている多くの子供達の教育者としてやってきました。そして私はすべての子供達のため心を痛めている母親としても困難な時、私たちのために注意を払ってくれ、できる限りの援助をして下さったあなた方親切な日本の友達に感謝します。あなた方は私たちに生きながらえ立ち上がるチャンスを与えてくれました。いかなる所においても原子力発電所の事故など滅するもない私たちは子供達が仲好く平和に暮らせるよう全世界の平和と友好を祈っております。あなた方の親切に感謝します。種は日本の、そして、日本の親切で同情心の深い人々の思い出としてまきましょう。援助ではなくただ平和友好のために私たちの所にお出でください。

住 所： 247705 ベラルーシ ゴメリ州 カリンコビッチスキー地区 ゴロチチ ミラ通り～19

No 20

ジュラブリョフ・ビヨートル

1979年 7月 2日生まれ 13才 172cm 54kg

家 族： 父 農業技術師 母 教師 妹 3年生 弟 1年生

サナトリウムに来た目的： 休息と健康診断のためです。

長所・特技： 趣味はチューインガムから（ ）、本を読むことが好きです。スポーツに夢中です。

住 所： 247709ベラルーシ ゴメリ州 カリンコビッチスキー地区 ホミチ～2

九州の皆様へ

皆様お元気ですか。お礼が遅くなってしましましたが、第二次使節団に同行させていただきまして、大層貴重な経験と学習をさせていただきました。これまで6次にわたるボク自身の訪問では得られぬデータが集まりました。評価を加えて後に個人的な報告をさせていただきますが、今日はボクの目でみた大きなポイントのみを送稿させていただきます。ボクらのつくった基金（今まで11次の使節団を送り出しました）の方法とちがう支援の展開の持つ意味についてです。

A 運動体とかかわるか、地域とかかわるかの違い。

風下汚染地帯への支援活動は、大きく医療と生活です。医療は治療と予防と保健衛生です。治療は甲状腺疾患にみられる明確な86年事故に起因する甲状腺異常への手当てと白血病治療行為に不隨する治療疾患（肝炎疾患など）への手当てです。白血病の因果関係は、これから観察（そのためにも検査診断を重ねてゆかなくてはなりませんが）してゆかねばなりませんが、基金の観察で得られた最新のデータでは、NK細胞はあきらかに異常の子供が発見されているので、その治療をはじめることで、悪性疾患へと陥ることを予防する手当てをはじめねばならぬ様です。保健衛生的分野は、汚染地の環境精査及び食物の安全管理、そしてミクロな環境コントロールを継続的になお

かつ地域自治体及び生産団体（コルホーズ等の生産者）とのネットワークの中で統計的手法などを効率的に用いてなされねばならぬ活動であります。生活は極言すると、何処に住むか、何を食べるかです。何処に住むかも詳しく言うと「どう住むか」ということです。そのためには環境の食品の放射能汚染の精密で継続的な分析的な検査を欠くことができません。保健衛生センターが国レベル、地方レベルでキチンと対応しているのは言う迄もありません。ボクらはここから全て生のデータをいただいている。貞志サポートがないと機能いたしません。また、各地域間、生産者間にネットワークをはりめぐらす必要があることなのに、そのための準備は行われていないのが実状です。そこで「どう住むか」ということですが、これは次の3のことからなりたちます。

- 住み続ける
- 移住する
- 選択的移住……の3点です。

いづれも「地域共同体」の崩壊という人間は社会的な存在であるという基盤。それも人と自然の結びつきに歴史（伝統文化、農耕地の形成という人的エネルギーにより培われてきたもの）が刻んできたものを離別させねばならぬという不幸を伴うのです。

ボクは今回、この「選択的移住」ということにひとつの可能性を模索しています。簡単に申しますと、子供は月～金、非汚染地の寄宿舎付き学校で（非汚染食料のコントロール下）学習する。土日は家に帰り、両親一地域共同体の成員として過ごすという社会システムを創りだすのです。そのためにコルホーズが活用で

きるというのが、今回の調査旅行で得られた貴重な収穫なのでありました。

さて、Aのコメントですが、運動体の性格として、他の団体との関係は、その必然として競合関係に陥らないかという危惧であります。そのことは必然に、優れている劣っている、やり方が違う、リーダーが独善的だ……と、政治的・社会的

(意見、見解)の差異が不協和をもたらしかねないという一般論の危惧であります。また前述の通りこうした団体はリーダーの率いるものであり、その人格性、能力に全体が引きずられるものであり、付き合いの成否も(全てそうではないと断りますが)大きなウエイトを属人的なものにしてしまいます。そして尚かつ、前置きに述べましたとおり、風下汚染地への支援活動は、必意〈地域の人々〉と結びつくことへ帰結いたすのでございまます。

B 「運動体」(ペラルーシ)百花繚乱の時代

ヤコベンコを中心とした21団体が同じテーブルを創ったところ伺いました(という意味では、政治的対立はないようですが、例えば、ここには平和基金は所属していませんでした……)。風下汚染地のために、自国で可能な限りの支援活動をと頼もしエネルギーを感じました。これからも見届けたいのですが、問題はその経済的基盤を何処に求めていくのかということです。いつまでも「外国の(当然の)援助」というのであれば不安ですし、行きづまる事でしょう。外国の支援を何の為にどう用いるのか、それをテコに「自主自立の社会経済(不

可欠)システム」をその運動体が持ち、支援活動を継続しようとしているのか。そのことを急ぎはしませんが、運動体の評価の場合、そういう目を持って付き合わねばならるだろうと思いました。

C ループル循環の自助システムの可能性

今回、中村隆一さんと学ばさせていただいたことが、ループルを生み出しながら、共助できる社会システムの可能性がありました。コルホーズは自治体に変わる共同社会がありました。これが汚染地住民(もちろん自治体をまきこんで)とネットワークするシステムを作ります。つまり、子供たちを受け入れてくれる学校(それをサナトリウムというなら)をコルホーズ内に設けてもらう。コルホーズは勿論、キッチンとした放射能コントロールをした上で決められるのですが(食品測定器の設置など)、このコルホーズがサナトリウム維持の運営費を生み出せるプラント(農産物加工場、そして保冷庫など)などの支援をする。農業経済的視野でみた効果的な支援活動を外国の経験と現地の経験者との共働の協議で見いだしてゆく。こうした作業が今さしあたって可能であるし、具体性をもつのだ、と。

こうして〈地域〉という視点からボクはまた考えを深めようと思っています。心からありがとうございました。

合掌 1993/2/5 大友慶次

А К Т

9 декабря 1992г.

г. Минск.

Мы, нижеподписавшиеся, составили настоящий акт о том, что Движением помощи Чернобылю о.Кюсю /Япония/ передана сумма денег в количестве 50000 долларов /пятьдесят тысяч долларов/ Белорусскому социально-экологическому союзу "Чернобыль" в качестве благотворительной помощи на развитие Молодежного реабилитационного центра "Кюсю-на-Свислочи".

Деньги в сумме 50000/Пятьдесят тысяч/ американских долларов передал:

руководитель делегации
Движения помощи Чернобылю

中村 隆市
Руиши Накамура /

деньги принял
президент БелСооС "Чернобыль"

Василь Яковенко /



\$ 5 0 0 0 0 ドルの受け取り書



На открытии реабилитационного центра в Стайках выступает Накамура-сан

и вели к взрыву смеха, проницавшем и счастливыми ульбками, песням. В заключение этого вечера вручбы музыкальная школа № 1 г. Минска дала серьезный, но просто мастерский, огололосый и яркий нарядки и краски концерт. Кейдзи Отому не мог оторваться от искушения и заснять все это представление на видеопленку. В восторге он то и дело скрывал свободную от камеры руку с оттопыренным большим пальцем, простирающим из кулочка: "Борос!"

Милые люди, добросердечные люди! Я вспоминал, как летом (а начинался сентябрь) они работали по собственным средствам на острове Кюсю своем родном острове, захватывающим дикой приро-

А К Т

7 декабря 1992 г.

г. Минск

Мы, нижеподписавшиеся, составили настоящий акт о том, что Движением помощи Чернобылю о.Кюсю /Япония/, участвующим в оздоровлении детей Чернобыля в Беларуси передан Социально-экологическому союзу "Чернобыль" новый аппарат УЗИ фирмы "Алока". в комплекте для Молодежного реабилитационного центра "Кюсю-на Свислочи".

Выше названный аппарат

передал :

руководитель японской делегации

中村 隆市

Руиши Накамура



БелСоДС "Чернобыль"

Василь Яковенко

Главный врач

МРЦ "Кюсю-на-Свислочи"

Анатолий Коптик

超音波診断装置の受け取り書